

## 大学図書館における聴覚障害学生の利用実態調査

菅野 風花

近年、障害学生の大学進学率の増加に伴い、様々な大学において障害学生に対して様々な支援が展開されている。しかし、視覚障害学生や運動障害学生には大学生活全般に対して支援が行われているが、聴覚障害学生には授業における支援のみに留まっている。これは、聴覚障害学生は視覚障害学生や運動障害学生に比べて支援の必要性が認識されていないからであると考えられる。そこで、本研究では大学図書館に焦点をあて、聴覚障害学生への支援で不十分な点と、その原因を明らかにすることを目的とした。

本研究では聴覚障害の在籍数の多い A 大学を対象とし、聴覚障害学生と健聴学生に対しアンケート調査およびインタビュー調査を実施した。アンケート調査は 2013 年 10 月から 12 月にかけて健聴学生 36 名、聴覚障害学生 22 名に対し実施し、それぞれ 35 名、12 名の回答が得られた。インタビュー調査はアンケート調査実施時に協力へ承諾した回答者 7 名に対し実施した。

調査の結果、アンケート調査結果より聴覚障害学生と健聴学生の間には世界の認識の違いがあるということが分かった。これは A 大学の蔵書量に対する聴覚障害学生と健聴学生の意見の違いや、ラーニングコモンズへの意識の違い等から考察される。また、認識の違いが原因で、サービスの提供が失敗していることが分かった。これはインタビュー調査結果より、レファレンスサービスの提供時の両者の認識の違いが原因でサービス提供が失敗していたことや、聴覚障害学生へ館内放送内容を伝達するサービスがなかったこと等から考察した。

以上より、大学図書館における聴覚障害学生へのサービス提供は、聴覚障害学生と健聴学生の認識の違いを把握した上で検討する必要があると結論づけた。

今後の課題は次の 2 点である。1 つ目は今回 A 大学の学生のみだった調査対象を、他大学の学生へと拡張させることでより一般化された意見を探ることである。2 つ目は認識の違いに着目し、具体的にどのような認識の違いがあり、その認識がどのようにサービス提供に影響を及ぼしているか調べることである。

(指導教員 宇陀則彦)